

# ツシマコメツキモドキの 幼虫・蛹に関する知見と生活史

境 良朗・松尾 進

The Information about larva and pupa and the lifecycle of *Tetraphala fryi* (Coleoptera, Erotylidae)  
by Yoshiaki Sakai\* & Susumu Matsuo\*\*

ツシマコメツキモドキ *Tetraphala fryi* (Fowler, 1886) (コウチュウ目オオキノコムシ科) は、日本では対馬だけに分布する大陸系のコメツキモドキである (Villiers, 1945)。寄主植物はワラビであるとされているが (黒沢, 1968), 幼虫や蛹については知られておらず、本種の生活史は不明である。ワラビは対馬島内に広く見られるものの、本種の生息地は非常に局地的で個体数も少ない。

本種の生活史を解明するために、筆者らは対馬島内においてそれぞれ個別に野外観察および室内での飼育を行ったところ、同様の結果を得ているので下記のとおり報告する。

## 野外観察記録

### 1) 成虫初見

1ex. (写真1), 長崎県対馬市豊玉町仁位, 8. V. 2016, 境観察 (ワラビ葉上にて); 1ex., 長崎県対馬市厳原町宮谷, 17. V. 2014, 松尾観察 (飛翔中)

5月初旬～中旬頃、ワラビの葉上に見られるほか、枯れ枝やコナラ・クリなどの葉のスイーピングで成虫が落ちてくることがある。(境)

### 2) 成虫交尾行動

1♂1♀ (写真2), 長崎県対馬市豊玉町仁位, 31. V. 2013, 境観察 (ワラビ葉柄にて交尾確認); 13exs., 長崎県対馬市美津島町雞知, 1. VI. 2015, 松尾観察 (ワラビ葉柄にて4ペア交尾確認); 1♂1♀, 長崎県対馬市豊玉町仁位, 10. VI. 2012, 境観察 (ワラビ葉柄にて交尾確認)

### 3) 成虫終見

1ex., 長崎県対馬市厳原町東里, 23. VII. 2015, 犬東幸子観察

### 4) 卵・幼虫・蛹

#### Authors' addresses

\*) Kuta 451-2, Izuhara-machi, Tsushima-shi, Nagasaki, 817-0032 Japan.

\*\*) Koebaru 2-9-7, Nagasaki-shi, Nagasaki, 851-1132 Japan.



写真1. ワラビ葉上のツシマコメツキモドキ



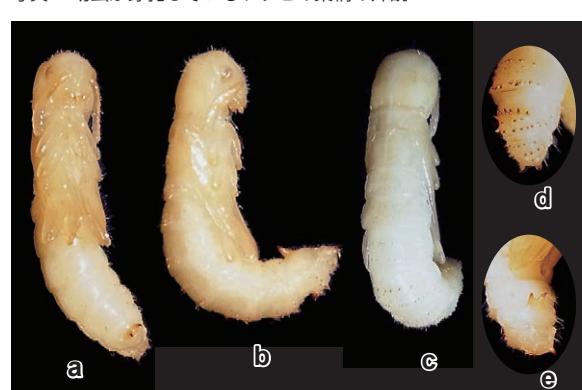
写真2. ワラビ葉柄にて交尾するツシマコメツキモドキのペア

2exs. 卵・9exs. 幼虫, 長崎県対馬市美津島町雞知, 7. VI. 2015, 松尾採集 (ワラビの葉柄内より); 6exs. 幼虫 (写真3)・3exs. 蛹 (写真4), 同地, 29. VIII. 2015, 松尾採集 (ワラビの葉柄内より)

### 5) 成虫の蛹室脱出前

1ex. (写真5), 長崎県対馬市美津島町雞知, 14. IX. 2015, 松尾採集 (ワラビの葉柄内より); 1ex., 同地, 10. XI. 2018, 松尾採集 (ワラビの葉柄内より)

### 6) 成虫の蛹室脱出後



1ex. (写真6), 長崎県対馬市厳原町東里, 10. XI. 2014,  
犬東幸子観察 (朽ちた蜂洞の木屑にて確認)

2018年11月10～11日, 美津島町雞知および厳原町内山において脱出痕のあるワラビ20本の根際を掘って探しでみたが、落ち葉や地中からは見つけられなかった。(松尾)

2014年12月18日, 美津島町雞知において脱出痕のあるワラビを多数確認。ワラビは完全に枯れており、蛹室

はすべて脱出済みであった。根際の落ち葉を篩うも採集できなかった。(松尾)

### 飼育記録

#### 1) 飼育実験 1

2015年9月13日, 美津島町雞知においてワラビの葉柄(写真7)内を穿孔中の幼虫1頭(写真8)を採集した。そ

の幼虫を取り出し、直径30mmのプラケースで飼育した。穿孔幼虫なので不安だったが、餌としてワラビをすり下ろしたものを与えたところ、同年9月23日無事蛹化した（写真9）。その後は羽化日を見落としつづけたが、蛹期は20日前後であった。（境）

## 2) 飼育実験 2

2015年7月9日、美津島町雞知においてワラビの葉柄内を穿孔中の幼虫2頭を採集した。採集時に一度割いたワラビをテープで固定し、ワラビを花瓶に差して、飼育を開始した。同年7月19日、そのワラビにカビが生えてきたため幼虫を取り出してタッパーへ移した。そのタッパーには餌として5cmほどに切った新鮮なワラビを入れて飼育を続けた。蛹化の時期を見落としつづけたが同年9月11日に1頭目が羽化し、また同年9月16日に2頭目が羽化した。その後、新成虫に水分は与えていたが2頭とも2ヶ月ほどで死んでしまった。（松尾）

## 考察

野外観察および屋内での飼育の結果、生活史は次のように推察される。

成虫は、5月中旬頃から主にワラビの葉上に姿を現し、

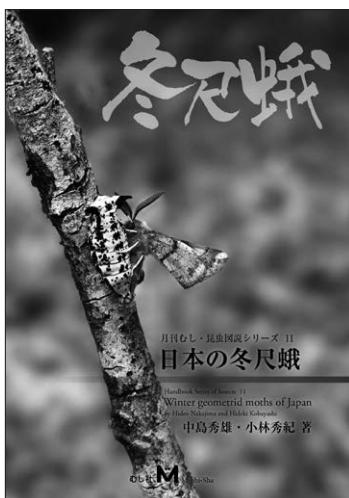
7月中旬まで見られる。その間、成虫はワラビの葉上で交尾を行い、その葉柄に産卵する。孵化した幼虫はワラビの葉柄内を穿孔し、その内で成長しながら盛夏を過ごし、8月下旬～9月に蛹化する。およそ20日前後の蛹期後、新成虫となって羽化し寄主から脱出してくる。新成虫は脱出した後、越冬するものと考えられるが、越冬場所については今の段階では判然としない。本種の冬から春にかけての生活史については今後更なる調査が必要である。

報告にあたり、貴重な観察記録・写真を提供していた犬東幸子氏にお礼申し上げる。

## ○引用文献

- 黒沢良彦, 1968. コメツキモドキ科5種の食草. 甲虫ニュース(4): 6.  
Villiers, A., 1945. Révision des Languriides de l'Ancien Monde. *L'Abeille* 37: 1-317.

# 月刊むし・昆虫図説シリーズ 11 日本の冬尺蛾



著者：中島秀雄・小林秀紀

体裁：A4判 152ページ（カラープレート47ページ）

定価 6,912円（税込）【送料サービス】

- 日本産のフュシャク35種503頭（♂384頭、♀119頭）の標本を、14カラープレートに図示（♂は原寸大、♀は1.3～1.5倍に拡大）しており、地域変異や個体変異などがひと目で分かる。
- ♂、♀、交尾個体、卵、幼虫など、全種について多数の美しい生態写真を掲載。
- 解説は採集難易度（♂、♀、交尾ペアをそれぞれ別に評価）、分布、寄主植物、幼虫、出現時期、配偶行動、産卵習性、交尾ペアの採集法、採集例など、フュシャクの魅力を詳しく紹介。
- 解説の後半は、著者二人の長年にわたるフュシャクにかける熱い、熱い、熱すぎる、尋常ならざる思いのだけを洗いざらいぶちまけた、すさまじいエッセイ集。
- 巻末には、著者（中島氏）の55年におよぶフュシャクの全調査データ（日時、場所、採集種）と、1090の交尾ペアの採集データを掲載。

むし社 ☎ 164-0001 東京都中野区中野2-23-1-209 Tel. 03-3383-1461・1462